

驕

樂

近藤元



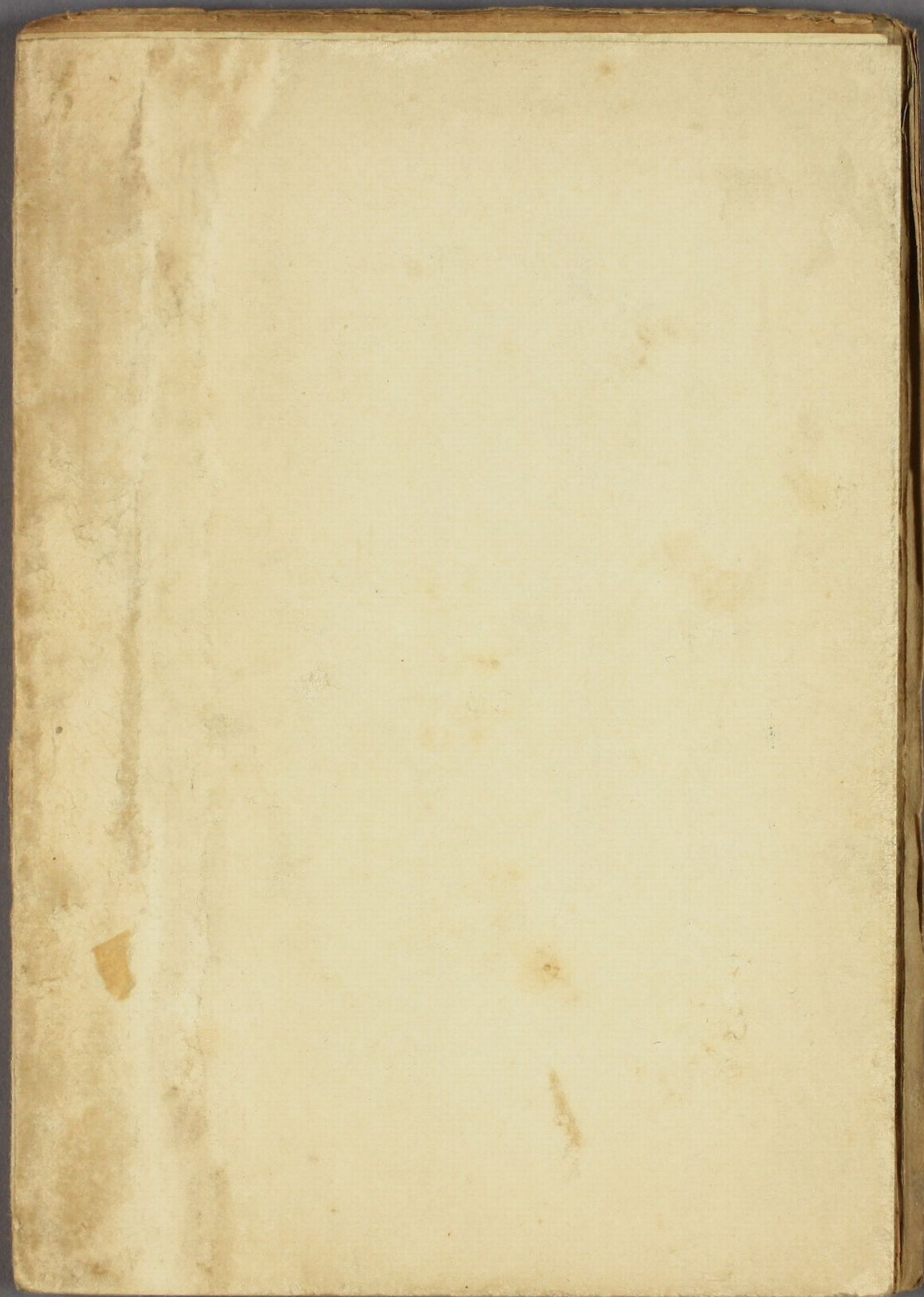
騎

樂

近

藤

元



驕  
樂

近  
藤  
元

驕  
樂

近  
藤  
元

—(次 目)—

驕樂……………一

安房より齋らせる……………一一

武藏野の歌……………四一

安房にかへりて……………一〇三

情緒と官能……………一一三

驕  
樂

驕  
樂



死ぬるべしされどしばらく少女子とゆるしゆるされ泣かしめたまへ

心うごく障子にうつる日のかげをものゝかげをば見てあるにたへず

春の雲乳のあたりのやはらかき肉置の上におく手のたゆき

電車走る日のかげぬるき玻璃扉に白き額のうつりて消えぬ

母の膝に春の日なかに餘念なくミルク吸ふ子をあかず見つむる

夕闇は病児の床に呻吟くごと大都の空にひそひそふりぬ

抱かれて子供の如く林檎かみまたしひられて  
接吻をする

ぬくみなくけがれし唇にわが唇の熱のうつる  
がかなしき夕

媚つくるたえまゝにうらざむう見ゆる疲れ  
のあはれなるかな

唇をはなれしばかり梅の香の冷たう闇にたゞ  
ようて来る

けがれたるその唇をしひられし初春の夜のう  
ら寒さかな

黒髪のおくまで春の灯にほふ女われより年  
多かりき

カーテンに赤ううつりしものゝかげ春の日か  
げにまた消え失せし

海のはとり男をみなノキスかはす繪の白かり  
し雲を忘れず

○春の日は七面鳥の色あかく變りし顔にさびし  
うてりぬ

○ふるさとの海に群れ飛ぶ白き鳥一羽まようて  
夢に來りぬ

○春の水流るゝ如く少女子のうたふが如き夢な  
りしかな

梅すでに散りつくしたるふるさとの安房の海  
邊を思ひ浮べぬ

青ざめて眠むる女よ、しめやかに大都の空に月  
すゝり泣く

しめやかに月のさゝめく聲きゝてまたしづや  
かにキスかはしぬる

こゝろよう疲れおぼえて月の夜の建物たてもののかけ  
にしばしよりそふ

月あればこゝに別れんいざさらば父の家にと  
はやうかへれよ

病院の夜ふけし窓にものおもふ女にねむる月  
の光よ

月よ月よ色青ざめし唇を女を思ひ汝れは泣く  
かや

鳥がゆく見たまへ紅き夕空に街のひゞきのど  
よめる空に

暮るゝ街橋のほとりにたゝすみて女を思ひさ  
びしうなりぬ

春ゆふべ肉屋の前に肉を買ふ女なせにか忘れ  
かねたる

やゝさめて灯あかき街を離るれば空に星あり  
疲れたるかな

いたづらに興奮したる神経のさむれば春の夜  
はまだ寒し

人妻よかはゆき汝れが兒に今宵乳房すはせて  
なにをおもふや

六人の女ばかりの兄弟の季すまの子なればかくも  
育そだちし（おくりたるうちより二首）

○さなりさなり汝なんぢは母がいふまゝに貶けなすがまゝ  
にわれ捨てんとす

思ふまゝ肉を食たうべて肉にあき葱をむさぼり  
芹をむさぼる

手をとれば抱けばやがて唇吸へばたゞおとな  
しう笑えらつくりぬる

○かい抱きいやかい抱きこのふたり飽くこと知  
らす終ひに涙す

いたくしく疲れはてたるキスの後の女のさ  
まの氣にかゝるかな

こゝろよく回復したる健康のたゞうれしくて  
家を出でけり

日を仰げば日は空にあり少女子よ心やすらに  
われに來れよ

やく疲れて電車通りを離るれば白き富士見ゆ  
友の手をとる

たちかへりまた出でゝゆく年若き藝妓にうら  
さびし春の日かげよ

もの思へば心しづかにかすみたる空に消えゆ  
くこゝろよきかな

○金絲鳥の飛ぶこともやめし春まひる眞白き雲の  
ゆるう流れぬ

憎しみぬ憎みのはてにいま一度抱かれて見た  
くなりて來にける

われ抱きて足らへる如きほこりをば憎むとも  
なく春の夜をぬる

こゝろよき女の群むらにたゞひとりうたひまじり  
て疲れはてぬる

たゞわれのかはゆきまゝにもてあそぶ女と知  
れどなほ抱かれぬる

春はさびしあはれむ如きほゝえみを女の唇に  
たえず見出で

飽くことを知らぬ男の犠牲ヒキシとなる女と思ひつ  
くみと見る



われ眠むる唄をうたひてこゝろよくこのまゝ  
殺せ小鳥よ女よ

ともにともにながく酔ふことあたはざる身な  
りしばらく抱き抱かれなん

唇をおきて指吸はれしがそもくのもてあそ  
ばるゝ始めなりしよ

こゝろよく目ざめし朝のやうくになすこと  
なくて疲れ來りぬ

青ざめて白うなりゆくわが顔を小さき鏡に朝  
なあさな見る

ものすきに遊廓への路をしへけり友出でゆき  
し後のさびしさ

やはらかう夕闇ふりぬ公園のベンチにもたれ  
眠むたくなりぬ

かすみたるまゝにいつしか暮れそめぬ女うれ  
しみ公園にあり

こゝろよう電車はゆるゝ釣草にもたれて眼と  
ち眼ひらきてあり(明治四十三年二月)

安房より齋らせる

汽船場に積みし荷物によりかゝり船を待つ間  
を火の山を見る

しづやかに海の彼方の火の山のけむりをはな  
れ心かへりぬ

逃げまどふわが官能をついばみてあはれ高啼  
く狂へる鳥は

おぼろおぼろかすめる晝の砂山に蜜柑のつゆ  
をうれしみて吸ふ

海晴れぬ冬の日なかにへだてなくものがたり  
してやがて別れぬ

ゆたかなる潮の聲きゝ枇杷の花散る山かげに  
連れだちにけり

さびしさに拾ひあげたる小さき石捨てがたく  
して持ちかへりぬる  
夕なり潮のひゞきに辛うじて見ゆる生命のな  
つかしきかな

潮の音のどよむ夕のあかるきに車にゆられか  
へりたまひぬ

信じ得ぬ人の噂のかすくをくりかへしつゝ  
松原をゆく

忘れ得ぬ黒き瞳よ、たゞひとり海にいそぎぬ風  
吹く夜なり

肩すぼめて歩みたまひし癖などを思ひ浮べて  
松原をゆく

君ならで今宵渚にわが泣くを知らじと書きし  
文も裂きぬる

熱病める如くにふるふ唇をひたすら吸ふに海  
赤う鳴る

わが唇をはなれてたゞちしづかなる潮の遠音  
に君はおどろく

やすらかに眠れる君が乳の上に手をばあづけ  
て潮なりをきく

青ざめし君が寝顔にまつはりてかすかにふる  
ふ夜の遠潮

ゆたかにも朝の日ざしの流れたる室に泣く泣  
く接吻くちくをする

水仙の一莖もちて潮ひたる岩のほとりに迷ひ  
出でにけり

冬の日の暮れ残りたる明あけきかげ松の上這ふ海  
なる夕

伊豆晴れぬ此方相模の山々の殊にあかるう海  
にうつりぬ

雲一ひらひねもす富士を去らざりし夕ぐれ海  
に風出でにけり

山越えて真白き雲のしづやかに名なき港に流  
れて入りぬ

柘ひらぎの青黒き葉に冬の日の淀む見居れば海のき  
こゆる

あゝひねもす口をつぐみて對ひ居し海暮れそ  
めぬいざかへらまし

友がかたる友の死にしといふことをなつかし  
うきく海なる夕

灰色に暮れゆく空にほの白うあゝ潮の音のふ  
るふかなしさ

美しきひとりをだましやがて捨て批難の聲を  
しづかにきかん

だまされてこゝに賣られしはした女のこのご  
ろはらみよく海にゆく

手まねすればすばやくさとり啞の子をなつか  
しみつゝものがたりする

安房の國菜花につゞく海の上に粉雪ふるなり  
一月の末

冬晴れぬこのごろ人の死なざるをさびしく思  
ひ海の邊にあり

あゝ海はいとあたゝかし身體からだをば大切たいせつにせん  
とうれしく思ふ

眼とづればあゝはてしなき砂原をたえみたえ  
すみわがゆくが見ゆ

あたゝかう冬の日てれる山かげの蜜柑畑に潮  
の音をきく

冬の日の海のほとりの夕ぐれの風たえし空に  
白き月あり



眼とづれば海血にそみてそのなかにおぼるゝ  
女ありく<sub>と</sub>と見ゆ

闇のなかいと赤かりし唇は消えぬまたもや潮  
の音のする

黒髪の一すぢ細う胸に書きそのまゝ死なん眼  
をとちてあり

流れ着きし死骸うづめし墓あまた並べるなか  
に日を浴びて立つ

なにごとも虫歯いたむになぐさます暮れゆく  
空を茫然と見る

かるときに死ぬるべかりしこのときに死ぬる  
べかりしさまゝ思ふ

うつらうつら熱にさそはれ潮の音をきくとし  
もなく昏睡に入る  
ふと目ざめいつかけものに近づける生命うれ  
しみ夜の海をきく  
人を思ふはあまりにさびし一ひらの雲をはな  
れてかへりし心

贈られしは皮肉の歌か知らねどもなつかしき  
まゝ海に出<sup>で</sup>てよむ(牧水に答ふる歌二首)

われ思ふと汝が歌に泣く泣くも安房を去らんと  
思ひ立ちぬる

心地よう疲れて冬の日のもとに女を思ひ砂山  
にぬる

海暮るゝ、あゝとかくして知りそめし女ことごと死ねよとぞ咒ふ

海なれりあゝたえがたきかなしさにをぐらき室をゆきもどりする

黝すみてしたゝる血潮思ひては獸の如く心よろこぶ

冬晴れぬあゝゆたかなる肉置しおきにふれてあるごと心ねむれり

春の海白きかひなをあたゝかうひたしてものを思ふべきかな

春の雲乳まさぐりしそのおりの手はおとなしう胸の上にある

接吻くちんくる君はやうくは嘴はあかき鳥とかはりて  
夢さめにけり

死を思へば生命やうくみち來る心かなしう  
春となりけり

春晴れぬおかせし罪のなつかしう思ひ出るま  
まなみだ流れぬ  
(自明治四十二年十二月  
至同四十三年二月)

武藏野の歌

唐辛あかくみのりぬ青々と大野の空は晴れ渡  
りたり

あなうれし仰げば鳥の如きもの朝あしたの空に消え  
ゆきしかな

蜀黍のたほれかゝりし一もとをよすがに遠く  
白き雲見る

雨ふれりかく思ひつゝしづやかにまたも寝に  
入る秋ふけし朝

秋ふけてまたも女を思ふころ野にをちこちに  
彼岸花咲く

あなさびしおもひがけなく迷ひ來し踏切のう  
ちにしばしたゝすむ

見てあればあゝしづけさのよりにて來るダリヤ  
の花の赤き一ひら

雲の如くあかるきかげのをちこちにたゞよふ  
ありて野は暮れにけり

木に雲に心おきなくしたしみし日は暮れそめ  
ぬかなしみの湧く

月光に木の葉がかへすかすかなる光みつめて  
ひたすらに泣く

あながちに女といはず人らみな戀しきまゝに  
月にひた泣く

見てあるま木の葉白みて月光の織ほそきにあはれ  
そよぎそめけり

をちこちに暮れ残りたる明あけきかげそのまゝさ  
びし月にたゞよふ

手をとればしづかにわれにしたがへる女を捨  
てに月のなかゆく

月出でぬほのかに黄ばむ天地のしづけきなか  
にたゞすみて泣く

うつむくにいと清かりし頸うなじをば思ひ浮べて月  
にひた泣く

夜はふけぬ潮の遠音のほの白う月をめぐるが  
なつかしきかな

外そとの面おもては月てる夜なりかく思ひたゞそはく  
と眠むられぬかな

月夜よしほのかに安房の國思ひ靈岸島の船宿  
にゆく

栗の果の一つ落ちけりしづかなる野の空遠く  
雲の流れぬ

秋の氣のすみたるなかに木の葉みないとかな  
しげにうちそよぐなり

新聞紙しんぶんの上に流れし朝の日のふとうするゝに  
かなしうなりぬ

秋ふけぬ床屋の朝の剃刀かみばさみの音にまじりてこほ  
ろぎをさく

しづかなりふときゝ出でし虫の音に秋の心の  
あつまりて来る



安房の國夏の夕はことさらにあかるく暮るゝ  
渚を思ふ

潮の音のほのかにものかげとなりたゞよふ  
如き暮れのあかるさ

ある夕知らぬ女のたづね来てすゝきをおきて  
かへりしといふ

夜はふけぬあはれはてなきしづけさのなかを  
たどりてわが心ゆく

ことさらにすべてのものをなつかしむこのさ  
びしさを人は知らじな

午後あはさかなしみ湧くをたへがたみふと野  
のなかの停車場にゆく

はてしなくさびしきまゝに畑<sup>はたけ</sup>刈<sup>は</sup>る農人ども  
に近づきて見る

ゆくりなく秋の心に酔ひしれて煙草の殻をな  
げうちにけり

なまぬるき秋の日なかに黒き犬われにさきだ  
ち尾をたれてゆく

木犀のあまき香みつるなかにして眞晝しづけ  
き鳥の聲きく

白芙蓉午後の日なかにそよぎ泣くあたりをめ  
ぐるかなしきかげよ

秋晴れぬ一もとたてる栗の樹の幹にしづかに  
耳あてゝ聴<sup>き</sup>く

今日もまた獣の如く憩ふべき日向をもとめ野  
をひとりゆく

日はぬるし女のことを思ふだにもものうかるま  
ま眼をとちてあり

眞裸體まはだかにこの世のなかに生れ來し日の思はれ  
てさびしき日なり

秋ふけぬたゞなにとなくふしぶしの疲れおほ  
えて日のなかをゆく

たえがたき戀とさびしさ身に沁しみみぬかはきし  
唇くちびるをふとしめすとき

やうくゝにさびしきことになれそめし生命う  
れしみ今日も野にゆく

今日もまた獨歩が住みし家の前遠まはりして  
野に泣きにゆく

黒髪の一すぢが身のいづくにかまつはるおぼ  
えさびしき日なり

秋となり秋もふけけりそのひまにあまたの人  
の死にゆきしかな

野は晴れぬあゝなまぬるき土の香のたゞよふ  
なかにむせられてゆく

日はぬるし青ざめたらんわが顔の氣にかゝる  
まゝかなしみの薄く

ひとりあれば眼とづる癖も指鳴らす癖もなつ  
かし秋の目のもと

木の葉みなほのかに黄ばむ日光のなかにしづかにそよ風をまつ

野の夕しづかに人のあらはれて遠に火を焚きやがて去りけり

心いまほしいまゝなりしづやかにまたかなしみの湧きて来るかな

やすらかに死ぬべきものは死なしめよ秋やうやうにふけそめにけり

秋晴れぬ潮の遠音の胸に沁む程のさびしさしたひては泣く

秋の日にたゞよひゐたる黄の蝶を忘れえずしてまたも野にゆく

やう／＼に黄ばみそめける大木の幹にすがり  
て遠き雲見る

霧深き里なり早く戸をとざししづかに秋の灯  
をなつかしむ

目醒時計の螺旋巻き終へて秋の夜の床に入る  
まのやゝのたゆたひ

同車して友の夫婦を送りけり鴛鴦あまた壕に  
浮く見て

暮れの色霧をまじへて女多く乗せし電車の窓  
に迫りぬ

そのふたり日曜のことかたりあひ目白の驛に  
降りてゆきけり

なつかしきわが口笛は秋ふけし野をひとりゆ  
きならひそめにき

落葉するばかりになりて木の葉みなそよがず  
遠く白き雲浮く

われとわれいとなつかしくなりて來ぬまた柿  
買うて今日も野にゆく

高き木のふもとにゆきてゆすれども落葉せざ  
るにかなしうなりぬ

秋の日はしづかに照れり心地よう飽の音の胸  
にひゞき來る

郊外の十一月の晴れつく日  
のしづけさに心  
老いぬる

かゝるとき潮の遠音のきこえなばいとやすら  
かに死にもしぬべき

この秋は汽車を待つときたゞ一度しみぐ虫  
の音をきくにけり

みにくうも生き残りたる人々のあはれに憎し  
秋ふけてゆく

年老いし世の人々をことごとく林の奥に捨て  
んとぞ思ふ

月出でぬ冷たき野邊にたゞひとり生き残りた  
るさびしさに泣く

月光のすみたるなかに天地のめぐるおぼえて  
なつかしきかな



やうく月に月は曇りぬいざさらば家にかへり  
てやすらかに寝ん

月夜よしほかにも人のさまよふをよけてしづ  
かに野よりかへりぬ

夜はふけぬ野よりかへりてやゝしばし机の前  
に茫然と立つ

月出でぬ大野のはてにさらくと風の流るゝ  
音きこえけり

月てれりあゝ青ざめしわが顔のふと夜の氣に  
うつりて消えぬ

月夜よし近くに越して來しといふ友を訪ぬる  
氣になりにつけり

霧深しふときこえ來る赤らかなの女の聲に足と  
めてさく

遊廊を逃れはせ來て月光の青しく野邊にうち  
ふるひ泣く

ふとしたることより友を失ひてさびしき日な  
り野に冬來る

水の如き冷たきかげの空遠く大野のはてに流  
れてやまず

空遠く木立の上を灰色にざら／＼けふる雲の  
流れぬ

生命死にぬ見渡すかぎり灰色の空に連る灰色  
の森

なまだるき欠<sup>あ</sup>伸<sup>ひ</sup>のあとにしみぐと黄ばみそ  
めたる木立ながむる

片側に傘あまた干す秋ふけし傘屋の前を目を  
浴びてゆく

青ざめし女の顔を忘れえで秋ふけし野はさび  
しかりけり

夕づきの疲れやうく癒えてゆくおぼえてあ  
はくかなしみの湧く

夕ぐれのあかるきなかにふるさとの櫓を押す  
聲を思ひ出でにけり

かゝるとき君が言葉のいかばかりうれしかる  
べき思ふもかなし

停車場に電車待つ間のさびしさに冬來ること  
をかたりあひけり  
空重し煙を吐かぬ煙突の眼に入るのみに電車  
は走る

今日もまた人におくれて電車出で家への路を  
たどり來しかな

人をうとみ人にしたしむそのひまに十一月も  
なかばとなりぬ

生き残り秋厭いとふまで年老いん後の日思ひさび  
しき日なり

秋晴れぬ一々門の標札をなつかしみつゝ野に  
泣きにゆく

よどみなく大野は晴れぬともすれば地平のは  
てにわが心ゆく

秋の日のしづけき野邊よほの白き光はなちて  
枯草そよぐ

あゝ秋の日はしづかなりそこゝと貸家さが  
して郊外をゆく

喰ひあきし蜜柑の皮をなつかしみ枯木のもと  
を去らんともせず

あゝ黒う木立々々はそのまゝに胸に残りて霧  
こめにけり

すゝり泣く女の聲をきゝさして霧の深きをい  
たく感じぬ

夜はふけぬものを思ふとあやまちて赤きイン  
キの瓶びんをたふしぬ

たくはへし小指こさきの爪をあやまちて折りしがあ  
はれさびしき日なり

いつ知らず酒を忘れて野をゆくにこの秋より  
は煙草おぼえぬ

ゆくばかり落葉に肩をうたれなばいかにかな  
らん野に思ひ立つ

秋ふけてあらはになりし赤松の木立のなかに  
つかくと入る

枯草の上におとせるわがかげの木々のかげに  
と黒うまじりぬ

野の夕黄にみだれたる日光のさびしきなかに  
風のまよへり

二三日絶えて思はぬ彼の女野のかへるさにふ  
と浮びけり

秋の街三十歳あまりの酔漢をあはれみつゝぞ  
家にかへりぬ

霧のなか灯の浮く方に戯言の時折きこえ夜は  
ふけにけり

眼をとちて思ふことなくしづかなるまゝにし  
づかに夜をふかしぬる

友が来て友の死にしを告ぐる日よいたくも野  
には秋ぞふけぬる

野に来てよりあまたの友を失ひぬ冬來ること  
のなつかしきかな

眠<sup>か</sup>足らざる朝のしばしを胸さゆるならひとな  
りぬ朝を野にゆく

高原の眞晝の雲にひゞきありなみだしづかに  
眼にあふれ來る

枯れそめし木々のおとせるかげふみてひとり  
しづかに晝の野をゆく

今日もまた林に入りて忘れたるかなしきこと  
を思はんとする

遠くより潮ひたよせん如くにもしばし夕野は  
すみ渡りたり



霧こむるゆふべゆふべは門に立ち路ゆく人を  
なつかしみ見る

手拭<sup>てぬぎ</sup>持ち湯<sup>ゆ</sup>銭<sup>せん</sup>を袖に投げ入れてひとりなる身  
は家を出でけり

夜はふけぬふと噛<sup>か</sup>み折りし鉛筆にナイフさが  
せど見あたらぬかな

ことごとく落葉しつくしあらはなる木立を奥  
に風すぎてゆく

夕されば獣の如くよろこびて落葉林の奥にふ  
み入る

たゞひとり落葉林の奥に入りこのごろなれし  
口笛をふく

落葉焚く白きけむりにまじりたる黄なるけむ  
りのことになつかし

ビシ／＼としづかに灰にうつりゆく落葉かこ  
みてわれら黙せり

林深し落葉にからむあゆみをばうつすにつれ  
てかなしみの湧く

野は黄なり落葉林の入口の一樹によりてまた  
爪を噛む

今日となりかなしきことをかたるべく野に連  
れ立ちぬ林にと入る

林深しなみだかくさず泣く君が肩にさびしき  
秋の日のかげ

眼とづれば落葉林を遠く遠く逃げゆくわれの  
ありくくと見ゆ

秋ふけぬ今日もどこにか人の子の生れしなら  
んさびしき日なり

あゝ心さびしきまゝにともすれば青すむ空の  
奥の奥見る

われとわがあらはになりてゆく心あはれみつ  
つも霜月に入る

冬来るや、おそれつゝよりて來しその日の君  
の思はるゝかな

訪ね來なば戸山が原に君待つといひ傳へよと  
家を出でけり

唐辛あかく干したる野に近き家の軒端にあは  
き冬の日

冬晴れぬあゝこのごろのおとろへを思ふとし  
もなく岡には来りぬ

冬ごもる獸のやから思ひつゝ冬晴れし野に枯  
草をしく

なみだぐみ地平のはての冬の日にとしづか  
なる山々を見る

散るべき葉みな散りつくしあらはなる木立の  
上に白き雲浮く

黄ばみたる木立々々をほの白き光しづかにか  
よふ夕よ

野に近う冬の日なかに建築をいそげる音のた  
えずきこゆる

冬の日はずかにてれり墓あまたならべるな  
かになみだぐみ立つ

墓地近き畑の土をたがやせる農人どもをなつ  
かしみ見る

しみくと冬の日ざしをうれしみぬ野の停車  
場に汽車を待つとき

秋暮るゝ黒き瞳のどよめきを君に見出でゝさ  
びしき日なり

たえぐに思ひ出でゝはもの思ふならひと  
りぬ秋暮れてゆく

音もなく秋より冬にうつりゆく大天地にしづ  
やかに生く思ひ出づるも思ふも  
そりたての顔なでながら床屋出でしばしため  
らひ野にといそぎぬ

あなさびし病むとしもなくおとらふる心抱き  
て冬に入るなり

思ひ立ち消息せんと走りたる心しづかに夜に  
消えてゆく

冬晴れぬしづかにわれをめぐりたるかげなつ  
かしみ野をひとりゆく

落葉してさびしくたてる一もとの幹とならぶ  
にかなしみの湧く

病院の窓にふと見し看護婦の白衣にあはき冬  
の日なりき

サフランのうすむらさきにあざやかに朝の空  
冬のうごけるを見る

氣まひるしづやかに湧くかなしみに密柑のつ  
ゆをよろこびてあり

密柑むく心しづかにふるさとの安房の海邊を  
思ひ出でけり

暮れ残る夕のかげにさそはれて心しづかに海  
を思ひぬ

ふるさとの安房の海邊にかへりゆき冬あたゝ  
かう泣き暮らさまし

熱を病む前のやうにもいそ／＼と夕の野より  
いそぎかへりぬ  
ひとりあればなみだしづかにあふれ来る夕ぐ  
れごとに消息を書く  
朝の空青うすみたり雞飼ひてなぐさめんとぞ  
思ひ立ちぬ

地震ゆすり淺間の山は火を吐くとたよりあり  
し日野に冬ふけぬ  
野を遠く遠くゆきなばやすらかにそこに死ぬ  
べし冬は晴れたり  
野を遠く林を深くまよひ入り心しづかに四十  
雀さく



麥のびて冬の日けぶる畑中を煙草くゆらしわ  
れらあゆめり  
や、傾き遠くつゞける平原の麥畑をゆき冬の  
目を見る  
山のあなたあかるきかたにさそはれていつし  
か冬の野に遠くあり

幼き日小鳥追ひしを思ひ出で冬枯れし野を手  
を拍ちてゆく  
冬の日けぶれるなかにしづまりてはるかに  
富士の山脈を見る  
松の枝と檜の枯れしと穂すゝきと野より持ち  
しを手向けまつりぬ(獨歩の墓に詣て)

年多き女の前につゝしめるわが姿をばあはれ  
む夜かな

死を思ひし後の心のしづけさにしみとく彼女の  
の戀しうなりぬ

かゝるとき女の一語よくわれを殺し得ぬべし  
ひたすらに泣く

青き灯に霧白う浮く停車場のほとりをまよひ  
夜をふかしぬる

夜はふけぬ遊廓に近き停車場のほとりに立ち  
て死をば思へり

おそく起きまづ今日の目をいかにして過ごす  
べきがと椽前に立つ

さしあたりわがこのごろに死ぬるより大いなる  
ことなしと思ひぬ

ふと友の死につることをなつかしう思ひ出で  
けり冬の日なかに

今日もまた灯あかき街にゆかんとしふと潮の  
音をきゝさしにけり

(自明治四十二年九月  
至同十二月)

安房にかへりて

日暮りて舟の影を  
見れば白波の  
中を渡る舟の影  
白波の中を渡る舟の影

舟の影を  
白波の中を  
渡る舟の影  
白波の中を渡る舟の影

夜はふけぬ海の中より眞白るな雲湧き出で、  
月をおふなり

月明し渚に細き一すぢの河を渡りてなほさま  
よひぬ

ひたくと潮みちて來ぬ岡の上に眞白き花の  
さゆらぎてあり

ふと眼ざめ海のひゞきのきこえ來るそのたや  
すさに夜は明けにけり

富士見えぬ相模の山も見えそめぬほのく夏  
の夜は明けにけり

明け方のさ蒼の海を流れ來るかなしみ見つゝ  
渚に立ちぬ

日に焼けし砂をふみつゝ海見つゝ女のことを  
思ひつゝくる

日は空に死したり白くたゞれたる海にさびし  
く風のまよへり

たゞれたる海面よ臭くなまぬるき風よ眼は盲  
ひ息は絶えぬる

夕ぐれのあかるきなかを一すぢの路をいそい  
そ海にと出でぬ

海の上いづかたとなく消えてゆく風を見てあ  
るかなしき夕

星とびぬ一すぢ細き赤きかげ見つめて心闇に  
死にぬる

海のほとり木の間さまよふ夕ぐれのあかるき  
なかにひぐらしのなく

海の面に松の木立にみだれ来る夕日にそよぐ  
初秋の風

ひたすらに黙したるまゝ今日の日を海の彼方  
に見送りにけり

海晴れぬ空のあなたにしろくとまぶしく秋  
の風渡るなり

蒼の海一すぢ黒う潮流のみなぎるが見ゆ秋立  
つ日なり

雲のかげしろくとみゆる大海のその一點に風  
のうごけり

空暗し見つめてあれば波の音の白くひびきて  
うちふるふなり

手を握りとく逃れ来て夕闇の渚に立ちし女を  
思ふ

風胸に沁む日となりぬ海に出でしづかに彼方  
富士の山見る

大空のいづれともなくわが胸にこたふる如き  
しづかなる日や

音もなく海より來り音もなく空に消えゆく初  
秋の風

茫として日は白壁にみだれたり聲あかくと  
ひぐらしのなく

風空にかへりてゆきし夕ぐれのうつろの海を  
茫然と見る

海と空はてなきなかに悠々と秋の心のうごけ  
るを見る

伊豆の山相模の山とむらさきの濃さもてわか  
つしづかなる日や  
(自明治四十二年七月  
至同九月)

情緒と官能



神経のいらだゝしさよせめてものなぐさめに  
とて人中をゆく

今日もまた夕の街の雑踏に對してわれは眼を  
とちてあり

汽笛の音電車のひゞき人の聲そのまゝにして  
夜となりにけり

われながら狂人じみし行爲ぎやうゐのこのごろうれし  
人中にゐて

いづれとも知らずわが身を辛うじて電車に乗  
せぬおそろしきまゝ

疲れはてぬながう吐息しひたすらに死にゆく  
如く寝につきしかな

三日<sup>み</sup>となり四<sup>ち</sup>日となりてやうくにおちつく  
まゝに戀しふるさと

ものすべて聲をひそめてこともなしわがふる  
さとを思ふひとゝき

君をなかに友となりにしその人の今日も來り  
ておそくかへりぬ

われ安房の子いかに思へど海の歌うたふは終  
にわれなりしかな

海の如き心を持ちて海に對ひ少女ひとりがあ  
りとし思ふ

松並木一重へだてゝ海にとなる小田によろ來  
る白鳥おもふ

午近く日はしづかなりうつらゝ安房の國思  
ひなみだ流れぬ

今日もまたかなしきまゝに不忍池しのばすのほとりに  
出でゝ故郷おもふ

春しづかに夕ざり來れば乳兒のやう空を仰ぎ  
てふるさと思ふ

春の朝渚あゆめどそれに似し人だになしとい  
ひ來せしかな

松並木その一もとの幹により遠く海見てあり  
と思ひぬ

夕ざればかなしき海の音きゝて育ちし心また  
よみがへる

ながきこと病みたまふまゝ蒼海の如き心となりたまひけり

眼とづれば渚はてなく君ゆきし足跡つゞき浮び来るなり

潮の音のきこえも来ずや茫然と空見てあればなみだ頬に落つ

初夏の光に射られ潮の香と柑子の香とに飢をおぼゆれ

安房戀し木々の緑に海の蒼おもふころとはいつかなりけり

しづかなる日なりき君はこともなう安房を去りぬといひ来せしかな

海よりも深山の奥に湧き出づる清水の如き生  
命なるらし

松により海をながめてありし子は柱によりて  
ものを思へり

われかなし安房の子なればやがてまた安房の  
渚にかへりゆかまし

初夏の光のもとに木の葉みなうなづくを見よ  
君なにおもふ

葉櫻の葉かげ葉かげにひそみよるかなしみ青  
う胸を射るかな

君よいま空の彼方に紅きもの墜ちてはてなき  
色に消えたり

わが生命いまたへがたうほがらかに聲をあげ  
たり若きをみなよ

初夏のそのなかぞらをさびしげに青き光のゆ  
きかふを見る

水色の空にしづかにたゞよへる目を仰ぎつゝ  
心ゆくなり

あるときは心も軀かみも一人にまかせて安きわれ  
なりしかな

若き木の葉うらをすべり風ひかる初夏來れば  
戀ひまさるかな

夢の如く青葉の上をやはらかう雲流れたり雨  
晴れてゆく

別れゆかばすべてを歌にことよせて心しづかに起きふしたまへ

君よ君と安房の渚の松かげに知りしはあはく夢のやうなり

かへるさのみだれし胸にいとけなき忘れな草の香をはなつなり

今やゆふべたへぬおもひに下野に草ふみわけ  
て入りたまふらん

小さな光あまたがよりつとひいとさびしげ  
に草の上を飛ぶ

さびしげに故郷の人となりにしとたゞそれの  
みをいひ來せしかな

白き鳥あしたの海に啼く如くいとさやかにも  
戀ひわたらまし

濃<sup>ニ</sup>やかなみどりのなかを流れ来る光をくみて  
生ける鳥あり

緑木のかほり冷たう沁み入りて死ぬばかりに  
も胸の清かり

戀ひ得なばかなしみ得なばこの若き生命のか  
ざりさゝげてましを

ふりそゞぐ夏の光に木も草もおなじく死をば  
思ふに似たり

夢のなか一すち白うかなしみの音もあらず  
にすぎてゆきにし



梢よりすみわたりにたるかなしみの五月さきの空に  
たえず消えゆく

かなしみあり底ひも知れず湧き出で、胸に満  
つまゝ、今日も生くなり

うつろなる大天地の茫漠とさびしきなかに木  
の葉そよげり

なにか知らず追ひつゝありし身のひたとより  
どころなくさびしうなりぬ

鳥はみな緑のかげに音をひめぬいざかなしみ  
にわれはゆかまし

このまゝに死にえなばとてともすれば眼とづ  
る癖をいつかおぼえし

ほととぎす一すぢあかう聲のあとたどりて死し  
にすがらんとしぬ

草青き野の小川よりいや清く冷たきかげの空  
を流れぬ

ひとときは鳥も木かげに音をひそめわれも泣  
かずに晝をまもりぬ

白晝さつるなりものみな白う死にはてしなかを光の  
さびしくかよふ

冷やかに胸おそひ來る青白き光のなかに君は  
死したり

戀ひ、狂ひ、死に去いなばとてひたすらに若き生命  
の黙してあるかな

血略きぬる後の生命のすみしより清きはなし  
と常にいひたまふ

暮れはてぬされども空のいづくにかあかるさ  
かげのまよふかなしさ

紅き花見れば異様の眼まなこするそのころよりぞ狂  
ひたまへり

高原に一むら高き木立見ゆあたりにせまる晝  
のかなしみ(以下雑司ヶ谷の野にて)

武蔵野の野なかの堂のおみくじに吉と出でし  
を草かげに讀む

初夏の大野のはてに流れたる雲白き雲に似た  
るかなしみ

寂寥の大野の空を電線のはてしも知らずうち  
つゞきたり

思ひうみ倦みてはまたも木や草のなかにたゝ  
すみ死をばおもへり

武藏野の野に出で、見れば空を遠く君ゐます  
方に雲のうごけり（以上）

ひやゝかに胸にふれゆくものゝあり櫓の木立  
のあかるきなかに（以下戸山が原にて）

底しれすすきとほりたる胸の奥に沁みてゆく  
かな櫓の若葉の

さびしさになれたる身なり櫓の木の木立のな  
かにもものをおもへり

檜木立あかるきなかにすみわたる心しづかに  
死をばおもへり

初夏の光しづかに流れたる青草の上をあゆみ  
ゆく馬

青野走る汽車見送れば別れし日白ぎぬふりし  
君をしぞおもふ(以上)

てりかへす晝の大路のはてしなくましろきな  
かを眼をとちてゆく

生命おもしろくろくのぼる煤煙の雲におされ  
てうごかぬ白晝

日のかたちくづれてあかくにじみたる空に沁  
みゆくわが生命かも

日のまひる一むら白う爛熟の大日をおふて風  
わたるなり

街なかにまよひ來にける黄の蝶のわれをめぐ  
るがなつかしきかな

さら／＼とこぼるゝ如き葉のそよぎきくだに  
いたきわが生命なり

夕づきぬ昨日の如きかなしみのまたかへり來  
て風を聴くかな

葉がくれにうごきて見ゆる夜の空のほのあか  
るきにまよふかなしみ

そよ風よわがかなしみよ晴れしまゝくらくな  
りゆく夕の空よ

一もとの柳のもとにたゝすみてやゝ遠のきし  
夜の街をさく

とびくゝにうつりて見ゆるくらやみの紅きか  
げ追ひ死にはてゝける

夜となれば人も忘れてうとくゝとねむり貪ほ  
る心となりぬ

青き月夢より白き木の葉よりいとしめやかに  
さゝやきさきこゆ

夜の氣の流れてやまぬ森のなかひとりひたす  
らまよひ來にけり

池の面にしづかによどむあかるさのあかるき  
まゝに暮れはてにけり

とびくゝにうつりて見ゆる赤き灯を追うては  
てなき闇に疲れぬ

曇りたるまゝに暮れたる夜の空に街のどよみ  
のあかくうつりぬ

おごそかに黙し更けゆく夜の森に生命さゝげ  
てもものをしぞ思ふ

夕空にしづかにかへる風のごと生命次第にさ  
びしうなりぬ

たのみ來し死しもやうくたのみなきものなり  
しぞと知りそめし日よ

戀ひ、狂ひ、性おとなしき人間にかへりて彼は終  
に死にけり



巻煙草くゆらし人のなき汽車の窓あけはなち  
夏の野に入る（以下百草山に牧水をたぎて）

榎の木の葉うらにひかる午後の日を窓に見て  
いま汽車は野をゆく

曇りたる空より黄ばむ麥の上にしづかにかよ  
ふ晝のかなしみ

麥の穂の黄ばみて明<sup>あや</sup>き野の晝に頬<sup>ほ</sup>白<sup>しろ</sup>鳥の聲の  
たえずまよへり

見てあればはるかに黄なる麥畑に白<sup>しろ</sup>きけむり  
のたちそめにけり

麥黄なる野の遠方の一すぢの白<sup>しろ</sup>きけむりは日  
にかたむきぬ

ひそくと巢をはりてゆく軒端の夏の夕の蜘蛛のいとなみ

暮れよどむ山の夕のあかるさにとりとめもな  
く梟の啼く

野には火の一つ一つと見えそめぬほのかにう  
ごく夜のあめつち

夜はふけぬ山にひそかになにものかさめゐて  
われにしたしむに似る

平原の六月末のしろくとまぶしき空を雨の  
あゆめり

麥刈られ土くろくとあらはれし大野にそと  
ぐ六月の雨

雨あがり白きけむりの赤松にすがるが如くま  
よひめぐれり

けむりあり疲れはてたる雨汽車の玻璃<sup>がら</sup>屏<sup>びん</sup>ごし  
にほのにまよへり (以上) (自明治四十二年四月  
至同 七月)

# 驕樂 終り

明治四十三年三月二十日印刷  
明治四十三年三月廿五日發行

定價金四十錢

著者 近藤元治郎

發行者 林廉之助

印刷者 小西幸吉

印刷所 東京市神田區三崎町三丁目一番地

日本印刷株式會社

東京市神田區三崎町三丁目一番地



發兌元

東京市神田區  
末廣町十八番地

光華書房

